

相生町における板碑の研究

考古班（徳島考古学研究グループ）

岡山真知子¹⁾・三宅 良明²⁾・下田 順一³⁾

1. はじめに

相生町の板碑についての研究は、町村史に散見する程度であるが、地元では近藤虎男氏・玉田晃氏が精力的に石造文化財の分布調査を実施されていた。その意を受けて、現在相生町文化財保護審議委員会が活動の一環として石造文化財の悉皆調査を実施している。今回はその成果を利用させていただきながら、相生町内に分布する板碑の実測調査（拓本を含む）を実施した。

2. 相生町における板碑の調査

1) 調査の経過

期 日 2000年7月26日(水)・27日(木)・29日(土)・30日(日)、11月11日(土)

調 査 員 小林勝美、三宅良明、下田順一、坂東美哉、岡山真知子

調査協力 相生町教育委員会、相生町文化財保護審議委員会、万福寺、西田實、湯浅裕、
勘川玉枝、福多重治、小川盛雄、滝盛一、山下都弘、立石安男、鈴木泰仁

内 容 相生町所在の板碑の所在確認と、すべての板碑の実測調査を実施した。

2) 板碑の分布

相生町内の板碑は、相生村史⁽¹⁾に11基、日野谷村史⁽²⁾に2基、相生町誌⁽³⁾に22基の報告がある。また、相生町文化財保護審議委員会の調査では、25基が確認されていた。これをもとに、相生町文化財保護審議委員西田實氏らの案内を受けて、調査を実施した結果、新たに5基を確認し、30基となった（図1・表1⁽⁴⁾）。

旧村単位を各地区とすると、相生地区に19基、延野地区に6基、日野谷地区に5基の造立が確認されたことになる。分布をみると、相生地区については旧街道筋（相生一勝浦）、延野地区については那賀川沿い、日野谷地区については那賀川沿いおよび旧街道筋に分布するという特徴がある。つまり、旧街道筋か那賀川沿いに分布しており、このルートで石材ないしは板碑が搬入されたということが想定できる。この点については、考察で詳しく後述する。

1) 財徳島県埋蔵文化財センター

2) 徳島市教育委員会社会教育課

3) 徳島市教育委員会社会教育課

3. 各地区の板碑（図2～図6、表1）

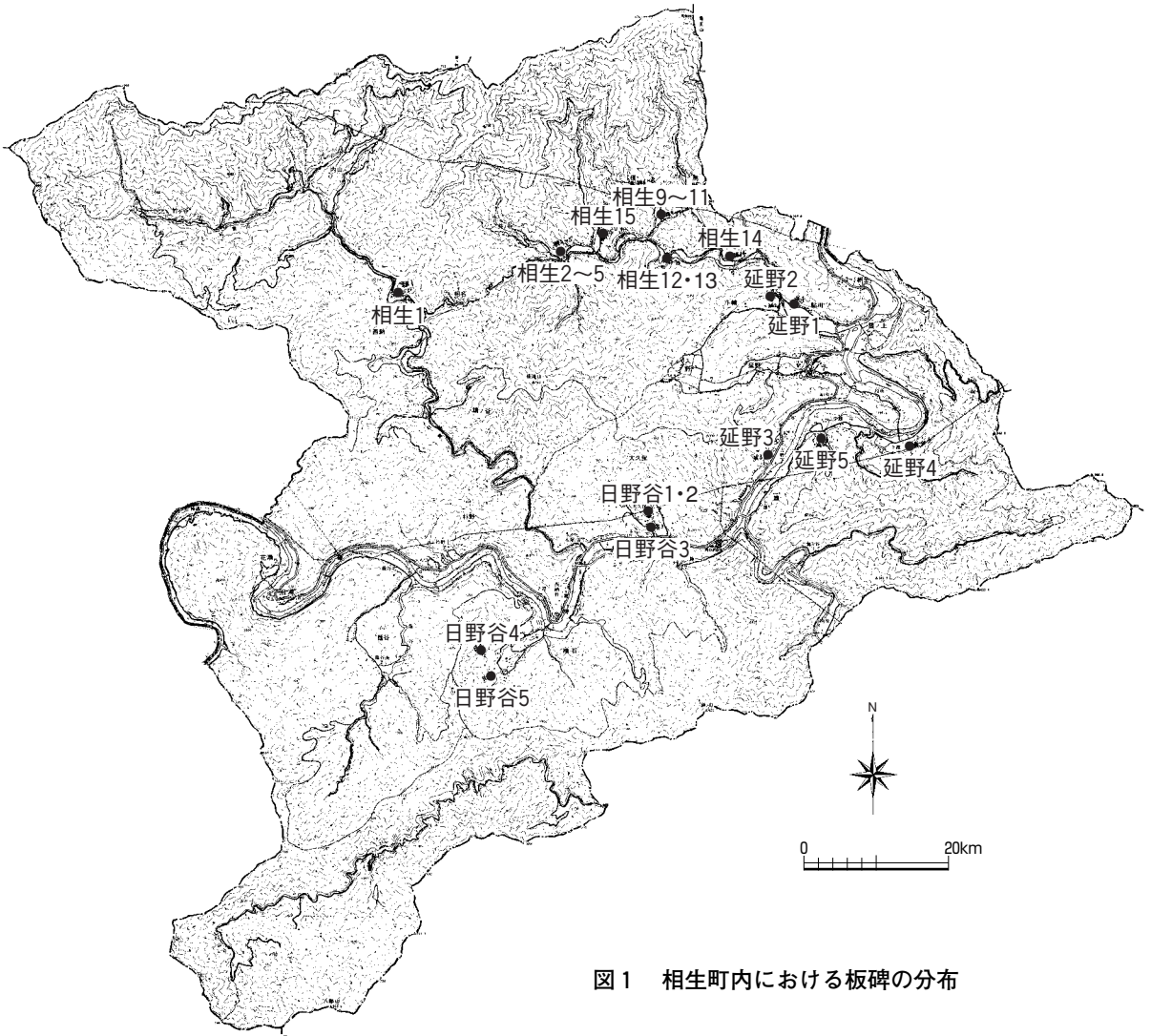


図1 相生町内における板碑の分布

1) 相生地区

相生地区では7カ所19基の板碑を確認した。ただし、相生1とした植原家の板碑は現在阿南市学原町に移転しており、『板碑の調査』⁶⁾に紹介されているので、それによった。相生11としたのは、基部のみで判断がつかないので、1基としたが、2基の可能性が高い。相生15は、現在正光寺墓地に移転されているが、元の所在地を示した。また、実測調査を行った結果、相生町の調査時は2基と考えられていたが、1基であり、接合することもわかった。相生地区の分布は、勝浦—相生間の通称霧越え沿いの旧街道沿いに分布している。1基というのは2カ所だけで、他は2～5基が確認されている。これは、同じ場所に立っていたというよりも周辺のを1カ所にまとめた結果である。

また、緑色片岩製の阿弥陀三尊種子板碑ばかりと考えられてきたが、今回の調査で砂岩製の五輪塔線刻の五大種子板碑を4基確認した。山形の形態は示していないが、地元の石材を利用した板碑が存在することは新たな発見である。

緑色片岩製の阿弥陀三尊種子板碑は、阿波型板碑の特徴を備えた丁寧なつくりで、種子の彫りも相生3・相生5・相生7・相生9は薬研彫^{やげんぼり}である。

2) 延野地区

延野地区では5カ所6基の板碑を確認した。延野1-1は五輪塔線刻であるが、他は阿弥陀三尊種子である。延野2・延野5は薬研彫である。また、石材は1基が砂岩で、他は緑色片岩である。相生町最大の板碑が延野1-2(図2)で、長さ85cm・幅35cm・厚さ3.6cmを測る。表面の磨滅が激しく、種子は不明である。なお、延野1は福寿院跡といわれている場所で中世寺院の存在が予想される。

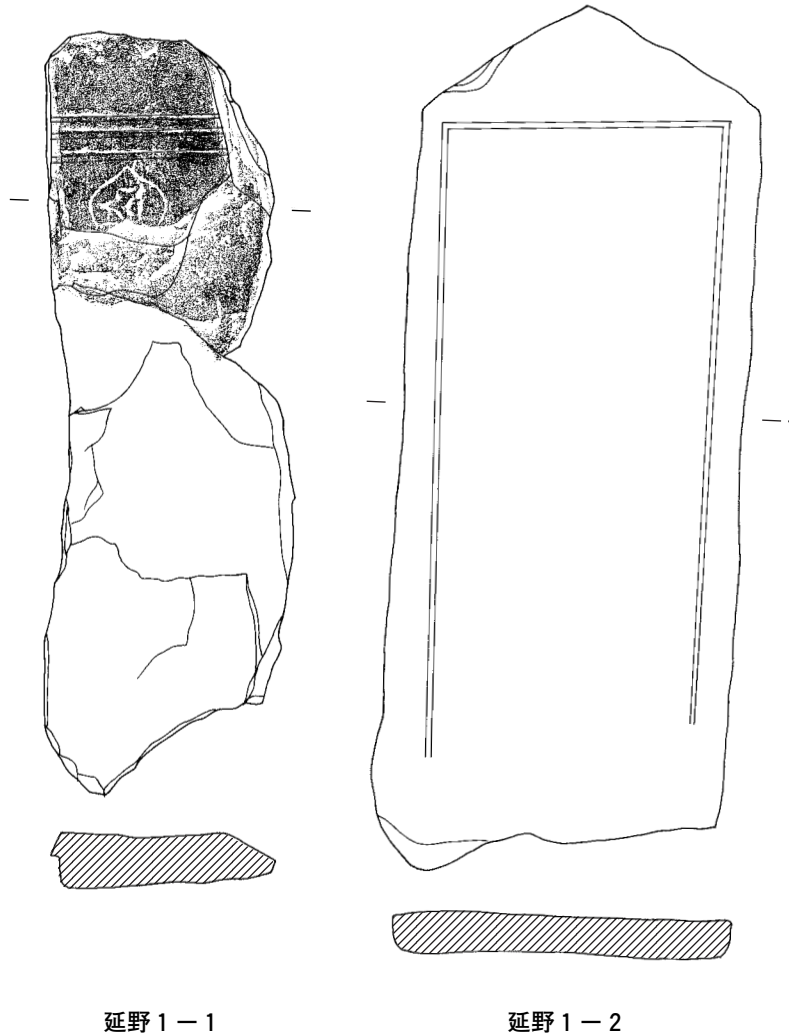


図2 相生町板碑実測図 No.1

0 10cm

3) 日野谷地区

日野谷地区では4カ所5基の板碑を確認した。すべて緑色片岩製の阿弥陀三尊種子板碑である。日野谷3は薬研彫である。相生町の奥まった位置であるが、峠を越えれば日和佐・海南へと抜けられる交通の要地でもある。

表1 相生町内の板碑一覧

No.	所在地	長さ	幅	厚さ	二線	枠線	標識	石材
相生1	相生町西納字上平間 植原正昭宅墓地 (現：阿南市学原町)	72.5	17.2	3.8	有		阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生2	相生町平野林谷坪井谷	63	17	2.7	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生3	相生町平野林谷坪井谷	62.5	19.3	3	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生4	相生町平野林谷坪井谷	80	18.8	3.1	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生5	相生町平野林谷坪井谷	67.2	16.8	1.7	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生6	相生町平野 福長家墓地内	51	17.5	3.4	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生7	相生町平野 福長家墓地内	64	15.5	4	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生8	相生町平野 福長家墓地内	54	19.5	3.5	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生9	相生町下平野 谷口6番地	70	19	4.5	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生10	相生町下平野 谷口6番地	72.3	15.5	2.5	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生11	相生町下平野 谷口6番地				基		不明	緑色片岩
相生12	相生町谷内字中分 福多重治宅墓地	30	16	2.5	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生13	相生町谷内字中分 福多重治宅墓地	46	16	4	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生14-1	相生町谷内字下傍示 能登一敏宅下の 県道北もと妙法寺墓地	45.5	15.8	9		有	五輪塔+五大種子	砂岩
相生14-2	相生町谷内字下傍示 能登一敏宅下の 県道北もと妙法寺墓地	33.5	13.6	7.4		有	五輪塔+五大種子	砂岩
相生14-3	相生町谷内字下傍示 能登一敏宅下の 県道北もと妙法寺墓地	48	15	9		有	五輪塔+五大種子	砂岩
相生14-4	相生町谷内字下傍示 能登一敏宅下の 県道北もと妙法寺墓地	44	15.5	9.3		有	五輪塔+五大種子	砂岩
相生14-5	相生町谷内字下傍示能登一敏宅下の県 道北もと妙法寺墓地	66	27.5	4	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
相生15	相生町辺川	69.3	16.5	2.5	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
延野1-1	相生町鮎川 福寿院跡	77	22	4.5	有	有	五輪塔線刻	緑色片岩
延野1-2	相生町鮎川 福寿院跡	85	35	3.6	有	有	不明	緑色片岩
延野2	相生町鮎川 西本哉宅 西願寺跡	27.8	18.2	3.5		有	阿弥陀三尊種子	砂岩
延野3	相生町吉野字祢宜吉野共同墓地左堂内	32.8	17	3	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
延野4	相生町雄龍王本60 滝盛一宅門前	47.3	19	4.5	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
延野5	相生町雄 法輪寺墓地内	53	12.9	4.1	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
日野谷1	相生町大久保字古屋敷79番地	40.5	19	3	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
日野谷2	相生町大久保字古屋敷79番地	39	18.5	2.8	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
日野谷3	相生町大久保 庚申庵	37.4	14.5	3	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
日野谷4	相生町横石 延命寺墓地	63.5	18	2.5	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩
日野谷5	相生町横石 山下都弘宅前大岩横	59	19	3.9	有	有	阿弥陀三尊種子	緑色片岩

3. 相生町板碑の特色

1) 法量

相生町内で確認した板碑の一覧は、表1にまとめた。結晶片岩の板碑は、長さ37.4cm～85cm、幅12.9cm～35cm、厚さ1.7cm～4.5cmである。これに対して、砂岩は長さ45cm・幅15cm・厚さ9cmとほぼ同じ大きさである。

実測調査結果をもとに法量をまとめると図3となる⁽⁶⁾。

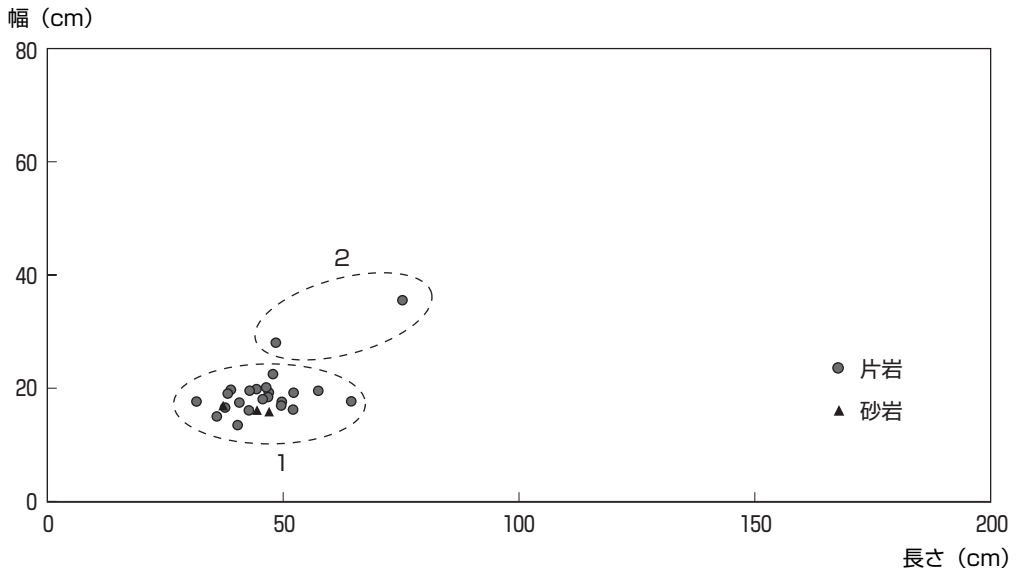


図3 相生町の板碑 法量分布図

図3では、大きく2つのグループに分けることができる。長さ45cm・幅18cm前後の1とやや大形で幅の広い2である。紀年銘のある板碑がないので、時期的決定はむずかしいが、徳島県内の有紀年銘板碑の法量分布と比較すると、小形化する後期の可能性が高い。

2) 標識

相生町の板碑の標識は、76%が阿弥陀三尊種子、17%が五輪塔線刻である。

徳島県内でも75%が阿弥陀三尊種子であることから考えても、妥当な数字である。ただ、名号や大日関連の標識が見られず、紀年銘板碑も存在しないことから、阿弥陀三尊種子が他地域から搬入されてきた可能性が高いことを示している。

3) 石材

相生町の板碑の石材は、83%が緑色片岩、17%が砂岩である。地元では、砂岩は産出するので、地元での製作の可能性はあるが、緑色片岩については他地域からの搬入を考えざるをえない。その際に、板碑の位置が重要となってくる。

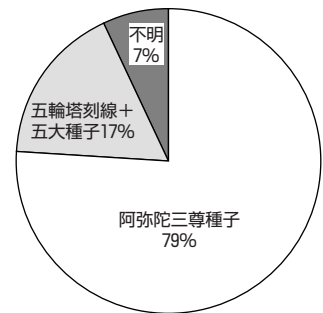


図4 相生町の板碑標識

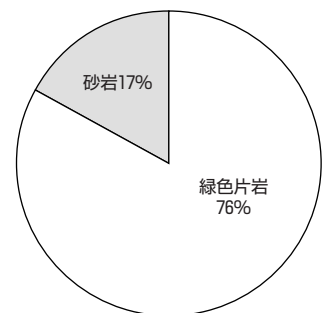
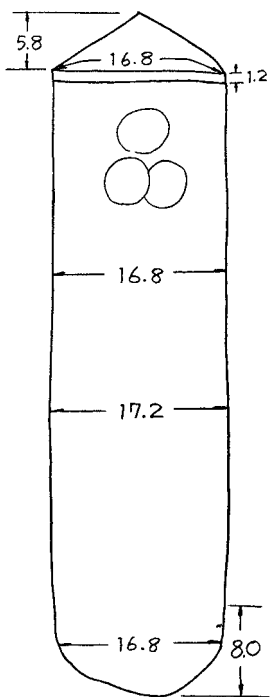
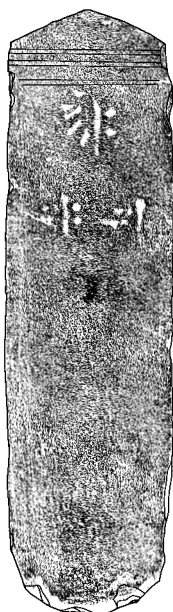


図5 相生町の板碑石材

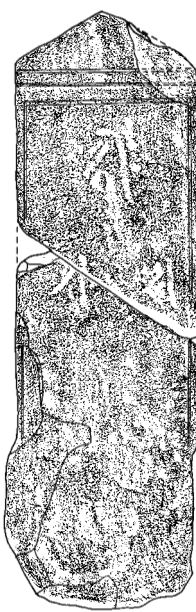
考古班



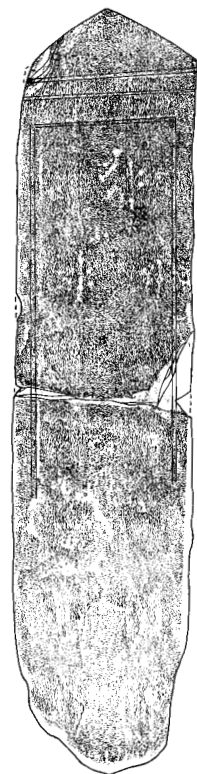
相生1



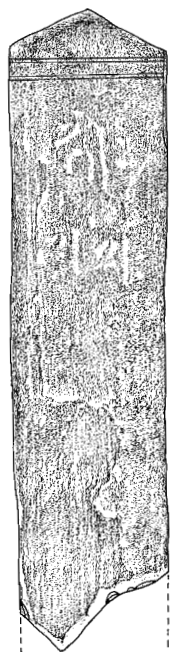
相生2



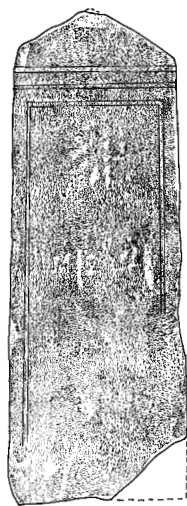
相生3



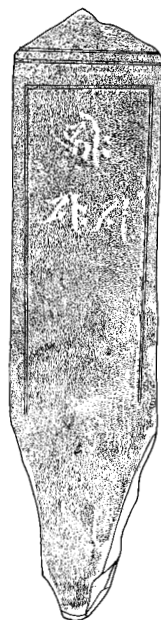
相生4



相生5



相生6



相生7



相生8

图6 相生町板碑実測图 No.2



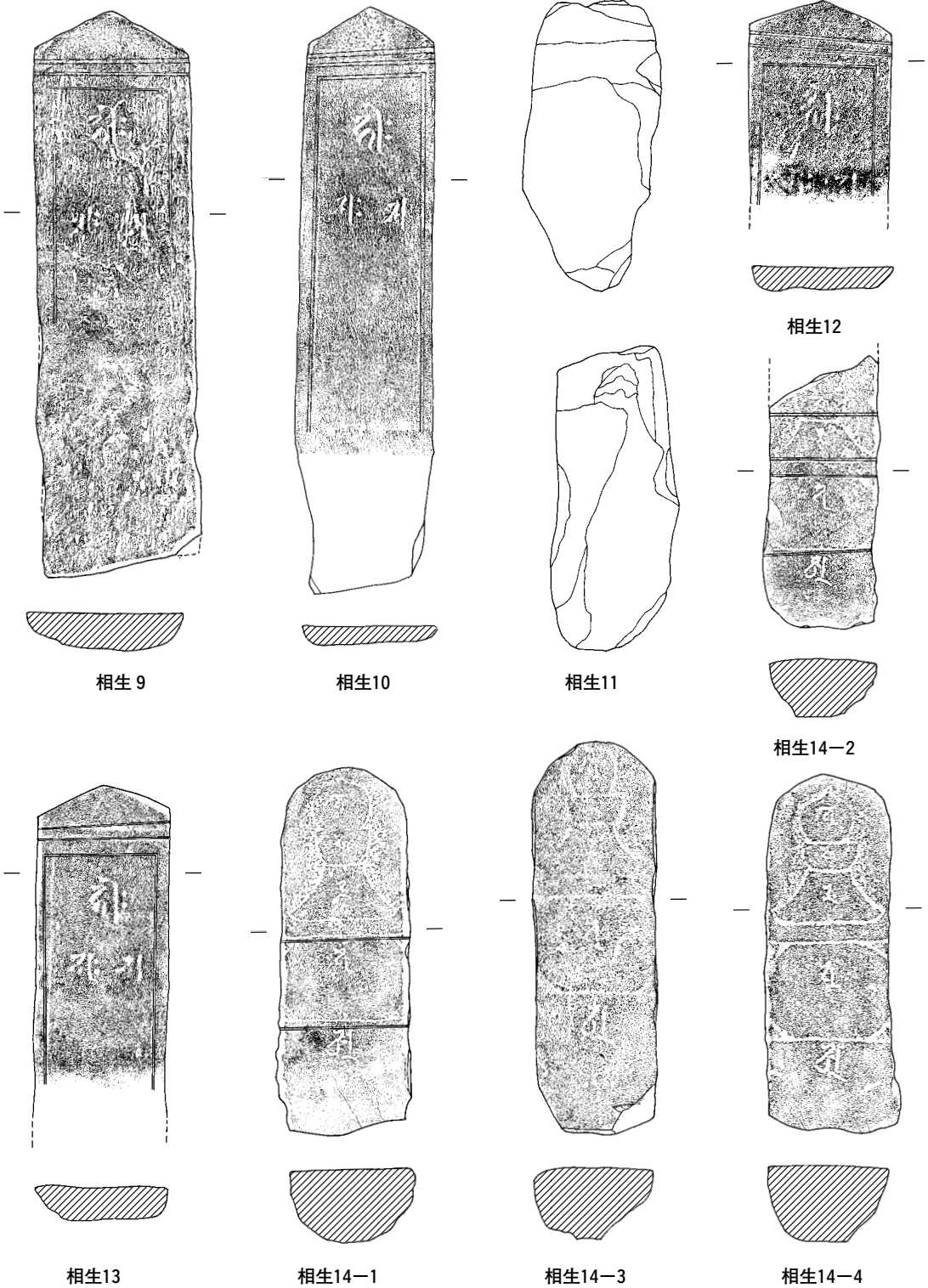
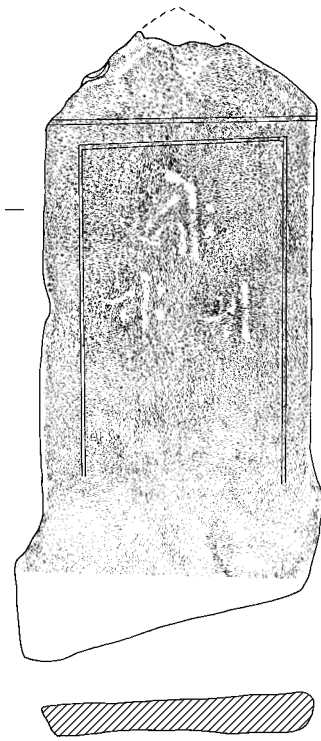
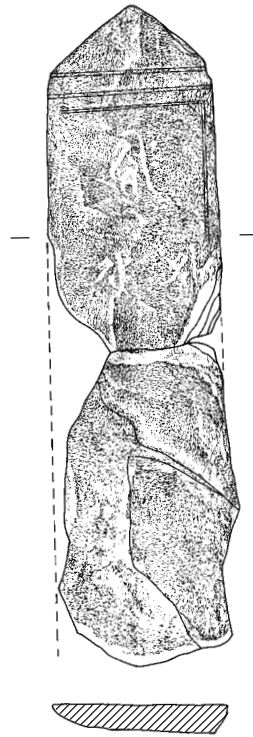


図7 相生町板碑実測図 No. 3

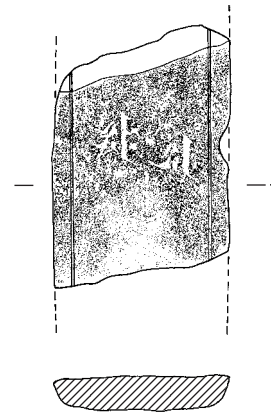
0 10cm



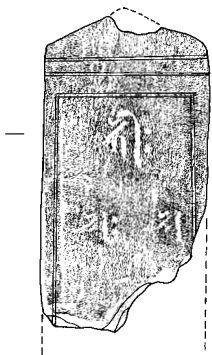
相生14-5



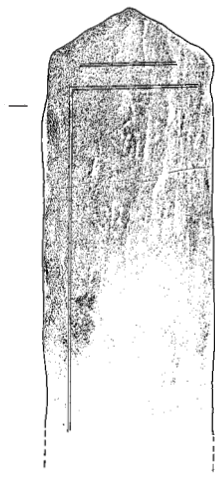
相生15



延野 2



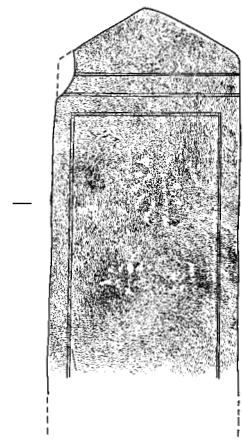
延野 3



延野 4



延野 5



日野谷 1

图 8 相生町板碑実測图 No. 4



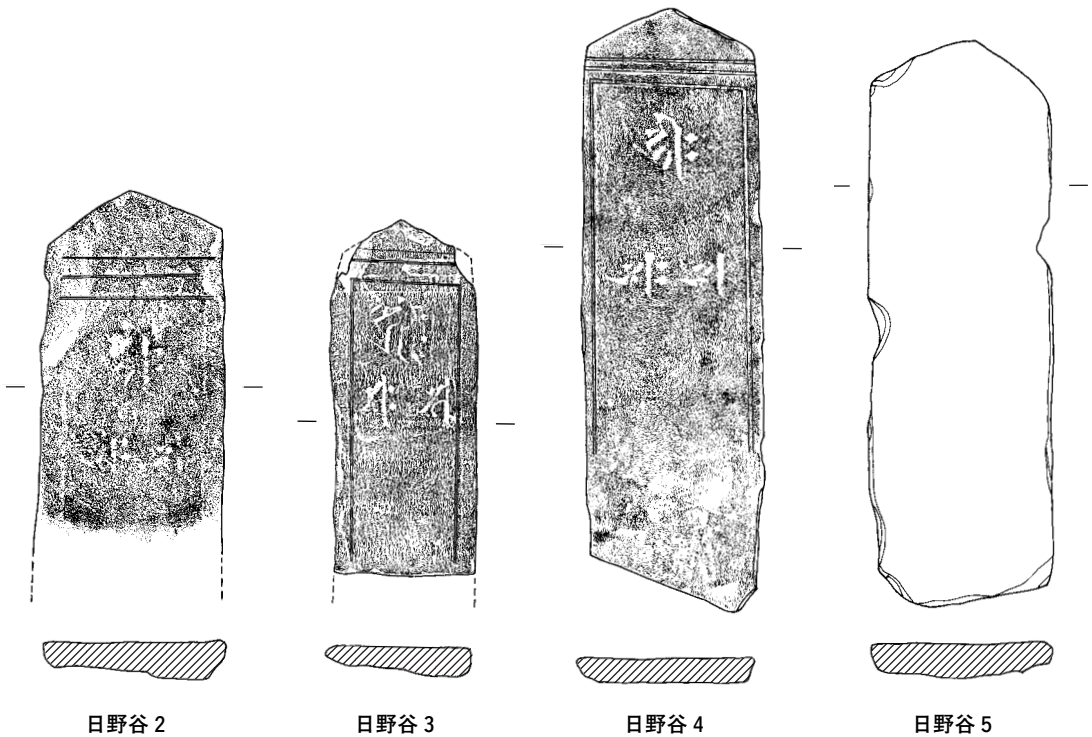


図9 相生町板碑実測図 No.5

0 10cm

4. 考察—県南部の板碑—

1) 県南部の板碑の分布

容易に石材である結晶片岩が入手できるので、阿波型板碑が多く造立されたと考えられるが、石材である結晶片岩を産出しない県南部地域での板碑について考えてみたい。ここでは、海部郡・那賀郡・阿南市・勝浦郡・小松島市に造立された板碑について分析する。前述もしたが、板碑の非常に少ない地域である。造立数は、海部郡由岐町3例・日和佐町11例・海部町1例・宍喰町5例、那賀郡那賀川町2例・羽ノ浦町6例・鷺敷町7例・相生町30例・上那賀町8例・木沢村12例、阿南市37例、勝浦郡勝浦町4例・上勝町8例、小松島市3例である。分布をみると、日和佐町・相生町・阿南市加茂谷地区に多いことがわかる。

阿波型板碑は、結晶片岩製がほとんどであるが、県南部では結晶片岩82例（77.4%）、砂岩23例（21.7%）、安山岩1例（0.9%）である。つまり、産出しない石材である結晶片岩の板碑が圧倒的に多いのである。これは、石材か製品か半製品が搬入されたことを示している。こうした問題意識をもって分析したい。

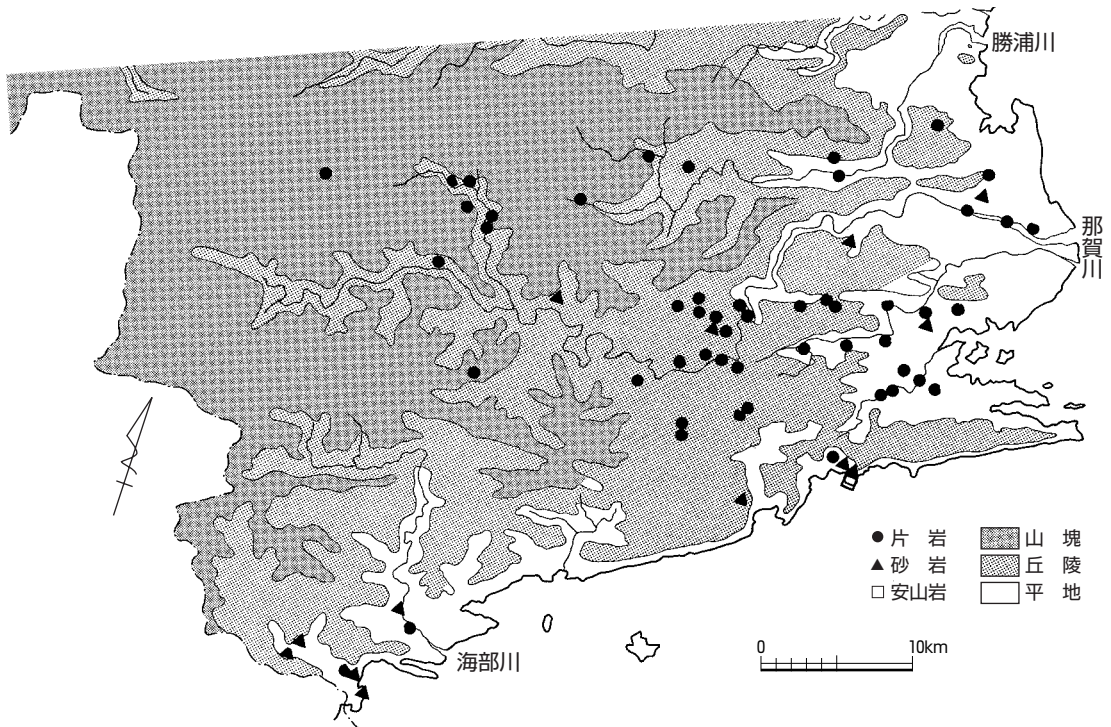


図10 県南部の板碑の分布

2) 法量

次に、県南部の片岩を産出しない地域の無紀年銘板碑の大きさは、図11のとおりである。これを有紀年銘板碑と対照すると、後期の特徴に一致することが分かる。また、これらの

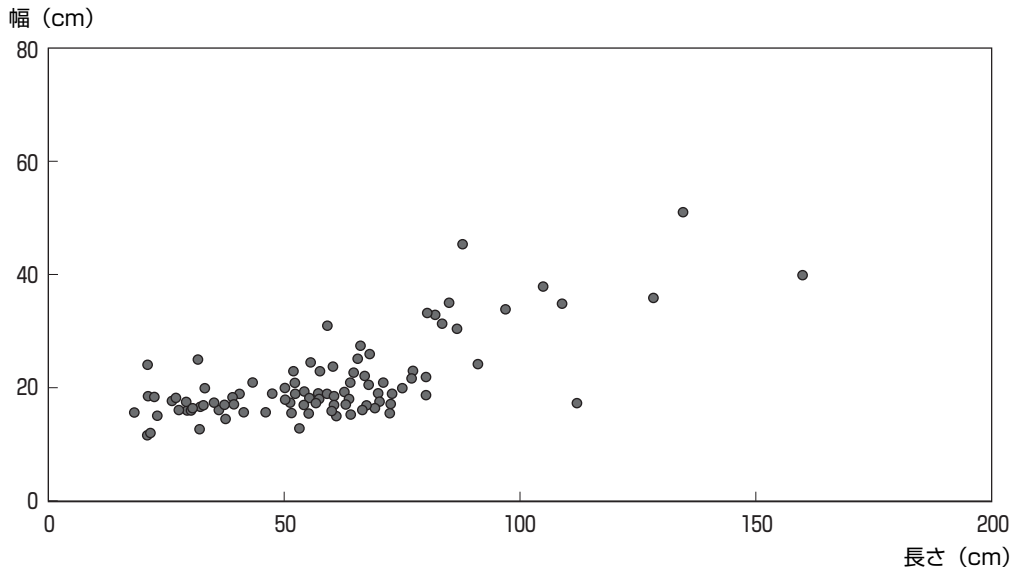


図11 県南部板碑の大きさ

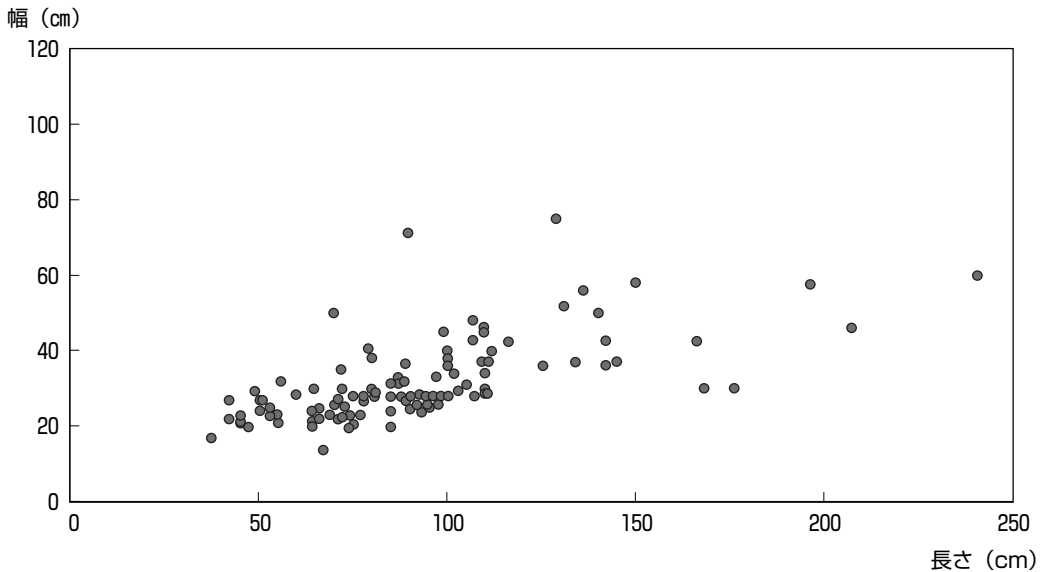


図12 徳島県有紀年銘板碑の大きさ 後期

地域の有紀年銘板碑は14例を数え、1328年～1590年である。前期末から有紀年銘板碑がみられるが、中期後半から後期前半の1370年代から1390年代が10例と72%と集中性をみせる。つまり、徳島県内での最も多い時期と符合する。

3) 標識

阿弥陀三尊種子が圧倒的に多い。また、種子の梵字の彫りが見事なものが多く、製品が搬入されてきた可能性を感じる。砂岩の五輪塔線刻板碑も見受けられた。

4) 特色

結晶片岩を産出しない地域として、県南部を分析したが、石材としては結晶片岩がほとんどを占めていた。若干、地元で産する砂岩を使用した板碑がみられたが、五輪塔線刻が多いなど、石材としての制約を受けていた。板碑に適する石材は、徳島県内では結晶片岩であることが再認識させられるとともに、産出地域からの搬入を考える必要性を痛感した。

また、砂岩製の板碑が海岸線に近い地域に多く、結晶片岩製の板碑は、内陸部というか旧街道筋に多く分布するという特色がある。那賀川筋にも分布するが、相生（川口）一日和佐（赤松）、上勝—旧相生、木屋平—木沢とかいった現在はあまり通行しない旧街道沿いに多い。鮎喰川流域から山越えで運ばれてきたであろうことが推測される。前述もしたが、中世の仏教活動のみならず経済活動のルートを示す資料となろう。今後、徳島県内の全地域の分析を通じて明らかにしていきたい。

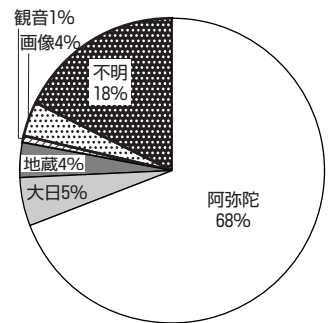


図13 県南部板碑の標識

おわりに

今回は、相生町内の全板碑について実測調査が実施できた。5基の新たな発見もあり、成果を残せたと思う。さらに、県南の他の板碑と比較検討できたことも成果の一つである。今後、徳島県内の他地域との比較研究を深めていきたい。

このように、充実した調査が実施できたのは、地元関係者の方々のご協力のお陰であり、深く感謝したい。なお、相生町文化財保護審議委員会は相生町内の石造文化財を精力的にまとめられている。ぜひともこの機会に出版されることをご期待申し上げたい。

註

- (1) 『相生村史』相生村 大正14年
- (2) 田所市太『日野谷村史』日野谷村 昭和11年
- (3) 鈴木泰圓「板碑」『相生町誌』相生町 昭和48年
- (4) 板碑に付した番号は相生町文化財保護審議委員会の調査番号をそのまま使用し、新たに確認した板碑には枝番を付した。
- (5) 『板碑の調査』阿南市教育委員会 1983年
- (6) 長さについてはすべてを同じ基準で捉える意味で、基部の長さを省いた頭部と身部の長さとした。